

# 『一心千里』

永田隆一

走って見れば、  
見えてくる



第78回

知人のお通夜の席、和  
尚の読経が続いていま  
す。地方の古民家の空気  
はとても厳かです。この  
場所で同じことが繰り返  
されてきたであろうこと  
が容易に想像できます。

「ガッハッハ」と大き  
な笑い声が突然上がりま  
した。声を上げた30歳の  
若者の前に座った男性の  
靴下に穴が開いており、  
片方の親指だけが覗いて  
いたのです。その親指  
がかわいいし、おかし  
い、笑いを堪えることが  
できなかったのです。

《脳も疲れる》  
作家の立花隆氏は主に

「宇宙」「セックス」  
「脳」の3分野の本を書  
きます。立花氏は「脳は  
筆者の友人に、お子様  
が引きこもりになった方  
がおられます。相談に乗

## 人間の脳も働かすぎると疲れる 健康であればおかしなことで笑える

働かすぎると疲れるもの  
であり、壊れやすくなっ  
ている。健康な脳は、おかし  
なことに遭遇した時、  
ちゃんと笑うことができ  
る」と書いておられます。  
件の若者が、靴下から覗  
いた親指で笑ってしまっ  
たことは、健康な脳を持  
っている証です。

《フリースクール》

つてほしいと依頼されま  
した。筆者のアドバイザー  
は「全寮制のフリースク  
ールを探して、お子さん  
に体験させて、本人納得  
のうえで入学させてあげ  
てほしい」。引きこもり  
は中学2年生くらいから  
が多いのだそうです。  
ある男の子は奈良のフ  
リースクールへ中学生で  
編入し、昨年、東京の国

立大学へ入学しました。  
ある女の子は東京・四谷  
のフリースクールから専  
門学校を出て結婚し、お  
子さんを持つたくましい  
母親になっております。  
また、ある男の子は岩手  
のフリースクールへ入  
り、今は米国の大学院で  
頑張っております。  
フリースクールはテス  
た子ども時代を送ってき  
たように思えます。  
就職でも日本企業、シ  
リコンバレー企業、多く  
の価値観が存在し、世界  
が多様性に満ちているこ  
とを学びました。

トをしません。教師も教  
科書を使いませぬ。黒板  
と会話だけの交流です。  
《選択肢は多い》  
筆者の父は転勤族。通  
常2年おきに転勤でし  
た。楽しい生活も辛い生  
活も、2年おきにオール  
リセットを余儀なくされ  
ました。学校や友達に対  
し、妙に斜に構えた冷め  
た子どもたちのために  
《子どもたちのために》  
感性豊かな子どもたち  
が、自分がしたいことが  
あるのに、したくないこ  
とを強制させられる学校

には通わせていない。妻  
と私が教えている」と聞  
いた時、とても衝撃を受  
けました。そして、多く  
の方が「全寮制の学校が  
良い」と話していました。  
《子どもたちのために》  
感性豊かな子どもたち  
が、自分がしたいことが  
あるのに、したくないこ  
とを強制させられる学校

という画一的なシステム  
は大きなストレスでしょ  
う。立花隆氏が言ってい  
ます。「脳も働かすぎる  
と疲れてしまう」と。  
東京に住んでいると驚  
くのですが、多くの人が  
ちがお子さんたちの「お  
受験」のため、低学年か  
ら塾へ通わせます。いた  
いけな子どもたちの行動  
パターンは、学校、コン  
ビニ、習い事、コンビニ、  
塾、そして深夜の帰宅。  
さぞや、お子さんたちの  
脳は疲れ切っていること  
でありましよう。  
《ビジネスマン》  
企業で働くビジネスマ  
ンにも同じことが当ては  
まります。  
第一義的に、生活の糧  
を得るための労働です。  
そうであるのなら、他の  
選択肢もあるはずですが、  
割り切ってそのことを考  
えることが大切です。労  
働者のための「フリー・  
カンパニー」、そんな夢  
のようなシステムも考え  
てまいります。  
理想は、企業内でおか  
しいと思ったことを発信  
できる組織です。企業の  
幹部は、真剣にそれを実  
現するために襟を正さな  
ければなりません。  
しかし、それ以上に大  
切なことは、ビジネスマ  
ン各人が組織に対して発  
信することでありま  
す。しかし、結果を出すこ  
とができる可能性を高める  
ため後で行つことが肝要  
であります。  
さあ、お葬式の場所、  
穴の開いた墓下から覗く  
親指に素直に笑える個人  
でいましょう。家族・友  
人、同僚にもそうできる  
空気を作りましょう。  
「笑年よ大志を抱け、笑  
負は時の運、笑心忘るべ  
からず」。  
(毎月連載)